

〔三下り〕和田の原、浪路遥かと夕風に、龍の都を出汐の、寄するも八十の浦島が
跡にひかるる恋衣、濡るるも夢とかぞいろに、のりしの海の船歌や

沖の洲崎に海士の小舟が、誰が恋風に独り焦れて、よんやさ、ゆさのたゆたのしよんがいな
磯部離れて木曽路山、寢覚心にとどり来る

袖に梢のうつりが散りて、花や恋しき面影のさつと吹き来る春風に、霞が生める初桜
花の色香につい移気な、菜種は蝶の露の床

忘れかねたる比翼の蝶の、情比べん仇桜

雪か雲かと峰の花

せめて薫の

たよりもがなと、思ひ暮らして

恋すてふ

空定めなき花曇、うつつ白波幾夜か恋に、馴れし情も今では辛や独り寝の、ほんに

思へばさりととはさりととは

昔恋しき浪枕うたてさよ、実にや七世の波枕を越えて、よもぎが浦の浦島が、尽きぬ契を語る

家土産